

体験版



kaleido scope

黒乃大和 著

オレがこの「藍聖学園」に入学して、ちょうど2週間がたった頃だった。

HRも終わり、ざわつく教室。半数くらいの生徒は、まだ残っている。

オレもそろそろ帰ろうと、友人の隆之と支度を始めていたところだった。

「……真崎 秀（まさき しゅう）君て、まだいるかな？」

生徒会長の補佐役に抜擢された秀。彼を待っていたのは、生徒会の仕事ではなく、生徒会長のお相手をする事だった。

抜粋

生徒会長はオレの前まで来ると、握手を求めるかのように右手を差し出した。

すらりと長い指。

「生徒会長の秋ヶ瀬 改（あきがせ かい）だ。よろしく。真崎 秀君」

「あ、はい……でも、オレなんで……？」

おずおずと右手を差し出した。なかなか握手できずにいるオレに業を煮やした

のか、いきなり右手をつかまれ、グイッと引っ張られた。

いきなりの事に、現状が把握できないオレだったけど……

え？ ちょっ……オレ、抱きしめられてる????

「私が君の事を気に入ったから。それじゃ理由にならないか？」

耳元に唇をよせてささやくもんだから、生徒会長の息が、くすぐったい感じで

オレの耳たぶにかかる。

オレ、なんだかゾクリときちゃって……

身体が硬直してしまっ、声もだせない。気に入ったって、何を？ なんなんだ

よ～！！

気づくとオレの唇に何か柔らかくて、暖かいものがふれた。目の前には、生徒

会長の顔……。

それが「キス」だと気づくまで、数秒（オレには何十分にも感じたけど）かかった。

男同士で、キス？な…なんで？

「ん……っ」

鼻から、妙な声が漏れてしまった。この人のキスが、嫌じゃなかったから、なのかな？

不思議と抵抗する気持ちは起きなかった。ただ、胸がきゅんと締め付けられるような感覚があって。

ゆっくりと、焦らすように生徒会長の舌が、オレの口の中に入ってきた。

歯茎をなぞられ、舌同士をからめ……。

どうしたんだろう、おれ。頭が真っ白だ。キスがこんなに心地いいなんて、想像もしてなかった。

キスという行為だけに神経を集中させてしまってる。

どうしよう、身体がしびれて……。この人の事、まだ、何も知らないのに……。

「ん、ふ……」

2人きりの室内に、濡れた音と、オレの声だけが響いていた。

オレ、信じられないくらい甘ったるい声だしてる。

腰がだるい……やばいよ、こんな……

どれくらいキスしていたんだろう。ようやく開放された時には、息があがって
しまって、立っていられなかった。

生徒会長はといえば、息一つ乱さず、さりげなくオレの腰に手を回し、オレが
へたり込まないように支えていてくれる。

「かわいいな、秀は・・・。」

にくたらしいほど、余裕だな、この人。あんな濃厚なキスしておいて。

オレには余裕なんて、ないのに・・・。

「君の唇、予想通りだった。今度は、次をいただくからね」

「だから...オレ、お前が会長にやられちゃったなって思って...」

「っ！ちがっ！そんなの、ない！」

「本当か？本当にまだ...」

「ん...キスとちょっと、その...」

オレがその先を言えずもじもじしていると、いきなり隆之がのしかかってきた。

声を上げるまもなく、唇を強引にふさがれる。

隆之の舌が、めちゃくちゃにオレの口の中をかき回し、オレの舌を絡め撮る。

うまく飲み込めなかった唾液が、口の端からこぼれていく。

「う...ふ...んっ...んっ」

なんとか鼻から漏れる息で抗議した。

隆之は、それが快感に熱くなった声と思ったみたい。

よけいに激しくくちづけてくる。

「そんな声、出すなよ...」

唇をほとんど離さず、隆之が熱っぽくささやく。

くすぐったい吐息に、

「あ・・・んっ」

またあ、変な声出ちゃったじゃないかよ。

隆之の手が、制服のボタンをひとつひとつ外していく。

オレは怖くなって身をよじるけど、隆之の力にはかなわない。

両手を隆之の胸について、力いっぱい突っ張るけど、あっさりと両手首をまと

めて頭の上で押さえつけられてしまった。

なんとか顔を横にずらして、オレは抗議の声をあげた。

「やっ...やめろよ...こんなの、お前らしくないっ」

「お前がオレの何をわかってるっていうんだ。」

そう言いながら、シャツのボタンまで外されてしまった。

首筋に隆之が顔をうずめて、舌をはわせてきた。湿った感触に、オレのあそこがズクンと熱くなる。

「オレがお前にしたい事、お前にはわかってないんだろ？」

触れるか触れないかの微妙な距離で、隆之がささやいた。熱い吐息が、オレの首筋をくすぐる。やばいよ、これ…。

隆之の舌が、徐々に下へと降りてくる。

「は…あ…っ」

隆之、オレ女じゃないのに。でも、湿って熱い舌の感触がオレを煽っている。

確実に。

その証拠に、オレの息子さんはすっかり元気になってしまっていた。情けないよ、もう。

「ああっ…やめ…そこは…」

いきなり乳首を舐められた。ねっとり絡みつく舌の感触。生まれてはじめての感覚に、身体がビクビクと震えた。

空いている左手の指先で、もう片方の乳首も弄られた。

指と舌で、少し痛いぐらい刺激を与えられる。

「はあ…ん…んんっ」

もう、頭が朦朧としていた。女じゃなくても、気持ちいいんだな～なんて、ぼ

んやりと考えていた。

隆之の舌で、たっぷりと乳首を虐められているうちに、いつのまにか、ズボンも下着も下ろされてしまっていた。

不意に隆之が耳元に移動した。

「なあ、秀。お前が欲しいんだ。入れても、いいか？」

熱い隆之の息が耳朶を湿らせる。やばい、またゾクっときてしまった。

熱にうわずったような、かすれた声で囁くんだもんなあ。

でも、流されそうになる自分を奮い立たせ、なんとか拒絶した。

「いや...だ。オレ、隆之とは、友達でいたい。だから...」

隆之の沈黙。...こ、怖い。オレ、卑怯なヤツだよね。ごめんな、隆之。

ふいに両手が自由になる。あきらめてくれたのか、ほっと胸をなでおろし...

って！隆之が自分のズボンを下ろして下着に手をかけているじゃないかよ！

「ちょっ、隆之！オレ、イヤだって...」

無言ですべてを脱ぎ去る隆之。うわあ、ご立派。オレなんか、おこちゃまサイ

ズなんだな。畜生！

いやいや、そんな事考えてる場合じゃなかった。

隆之が再びオレにのしかかってきた。ギシッとベットが音をたてる。

「やめ...っ！」

「なあ、秀。お前のここ、辛そうだぜ？」

視線をオレのものに誘導する。確かに…。先から涎たらしめて、いかにも「イキたいです！」って自己主張してる。

「オレも辛いんだよ。わかるだろ？だから、オレにまかせろ」

ゴクリ…と喉がなった。隆之の立派なあれも、もう限界ってくらいになってる。だけど、まかせろって…。

隆之はいきなり、オレのに自分のものをすりつけてきた。

「ひっ…なっ…なに？」

オレが驚いているのもおかまいなしに、2人分のアレを隆之の大きな手で握りこんだ。>

ゆっくり、扱きあげていく。上手く腰まで使って。

「あ…あああぁ…はぁ…」

ぐちょぐちょと湿った音がオレの耳に届いて、オレは余計に煽られてしまった。

隆之もうっとりとオレを見つめ、荒く息をしながら快感を貪っていく。

「駄目だ…よぉ…たか…」

これ以上、隆之の顔を見ていられない。かわいく思えて、胸がきゅんとしてしまったからだ。

オレはぎゅっと目をつぶって、快感にみをゆだねた。

これが男の悲しいところで、一度火がついてしまったら、放出してしまわない

ことにはおさまらないから…。

ふいに、改の紫水晶の瞳が瞼に浮かぶ。

(…改)

改の事を思った途端、胸がズキンとした。罪悪感なのかな？

紫水晶の瞳が、頭から離れない。

オレはいつの間にか、改とHしてる気分になってしまった。

「ああ…んあっ…お願いっ…」

腰が勝手に揺れる。隆之の腰使いに合わせて、オレも腰を使って、より深い快

感を探ろうとしていた。

「駄目…もう、い…イクッ！」

「いいよ…秀…オレもいっしょに…」

ぐちゅぐちゅといやらしいおとをたてて、お互いを追い詰めて…

オレは無意識に隆之の腰に、足をからませている。

「ああ～っ！！もう…あああああっ…改！！」

オレと隆之は同時に果てた。オレのおなかの上に、2人の熱いものが飛び散っ

た。

2人とも、荒い息を整えながらしばらく動けずにいた。

「しゅ...秀。お前、イク時に生徒会長の名前呼んでたぞ」

え？マジ？あの時は、意識とんでて...

「お前、あいつの事、好きなんだな。...よく、わかったよ」

「ん...」

改のキス。大好きだ。これだけで思考能力がなくなる。しつこいくらいのキスだ。

ついにむように、やさしくしてくると思えば、急に深く舌を絡めてくる。その繰り返しに、オレはもう頭が蕩けてしまって...

キスをしながら、ゆっくりとたちあがる。椅子をガタガタいわせながら、気づくと窓際に追い詰められていた。

「は...ああ...っ、ここじゃ、外に見えちゃうよ...」

息もたえ絶えにオレが訴えても、改は意地悪く微笑むだけだった。

「あっ」

急にオレの身体をくるりと反転させて、窓ガラスに押し付けた。

後ろから、改が身体を密着させてくる。オレの腰に改のアレが当たって...

(改、すごい事になってる...)

改がそれをグイグイと押し付けてくるものだから、オレはなんだか変な気分になってしまった。

「改...すご...」

「秀が...可愛いから、ね。でも、悪い子だからちゃんとおしおきしないと」

「だから、オレ...何も...」

「ふうん。いつまで、そんな事言っているのかな？」

思いっきり意地悪な声をオレの耳元で囁きながら、オレの制服のボタンを外し始めた。

「んあ...」

改が耳たぶを噛むものだから、いやらしい声が出ちゃったじゃないかよ。

改は耳を噛んだり、舐めたりしながら、制服のボタンをすっかり外してしまった。

そしてYシャツの裾をめくり上げて、オレの胸元を撫で回す。

「やっ...はあ...ああ...」

「ここも、いじられたんだろう？」

オレの両方の乳首を、きゅっと痛い位に刺激する。

「うあっ...あ...あ...」

痛いけど、でもじんわりと快感が広がる。下半身が、熱い。

指先で転がしたり、つまんだり…。楽しいおもちゃを手に入れた子供みたいに、執拗にもて遊ばれてる。

「ここ、いじられて感じたんだな？秀の身体は正直だから、ちゃんとわかるんだよ」

オレは観念して、コクンと頷いた。

「こんなところ位で感じるなんて、淫乱だな」

「もう、許してください…。もう…」

「駄目駄目。ここだけじゃ、ないだろう？」

そう言いながら、改の手が下へと降りていく。器用にオレのズボンと下着を、一気に膝まで下ろしてしまう。

改の手が、オレのものを握りこむ。痛いくらいに。

「い、痛いよ…改…いや…」

「いやじゃないだろ？この嘘つき坊やは。こんなに立たせて」

「や…恥ずかしいよ。外に丸見えじゃ…」

「中庭だから、誰もいない。でも、いつ誰がくるかわからないな」

「じゃあ、やめ…」

「ふふ…誰かに見られるかもって、刺激的じゃないか？」

今日の改は、本当にいじわるだ。どうやっても開放してくれる気はないらしい。

いきなり改がしゃがみこんだ。

「？...改？」

改はオレのおしりに顔を近づける。何する気なんだよう...

「んあっ！」

オレの後ろの穴に湿った感触が...。改がほぐすように舌を使ってオレのを...

「も...やめて...そんなとこ舐めたら...」

おまけに指までいれてきて。

「ここもいじられたんだろ？秀は、ここ、好きだからね」

「ちがっ...そんなとこ...ああっっ」

改は1本ずつ指を増やして、オレのをほぐす...。自分でも驚くほど、貪欲に改の指を飲み込んだ。

長い指を器用に使って、オレのなかをかき混ぜていく。もう、腰に力が入らない。

改はゆっくりと立ち上がると、またオレの耳を舐った。くちゅくちゅと指で掻き混ぜながら。

「指が3本も入ってる。秀のここは、食いしん坊だね。もっと美味しいもの、欲しくない？」

「ふ...んんっ...ほ、欲しい...」

何の事が分からないけど、オレ、欲望に忠実になってしまって…。

いきなり改の指が引き抜かれると、代わりに熱いものが入り口にあてがわれた。

「秀…お前とひとつになりたい…」

次の瞬間、熱くて硬い改のアレが、オレの中に入ってきた。

「ひっ…イヤ…だ…無理…」

「力を抜きなさい、秀。そんなに締め付けたら、息が…できない」

生まれて初めての衝撃に、オレは息もできず、かといって叫ぶ事もできず身体を振るわせる事しか出来ずにいた。

すると改は、オレの前に手を回すと、オレのアレをゆるゆると扱き始めた。

気持ちがそちらにむいて、新たな快感の波がオレの飲み込んだ。

「あ…あああ…か…改…」

いくらか、後ろの力が緩んだ。そこへ一気に改が押し入ってくる。

前をいじられ、後ろから容赦なく突き上げられる。オレのちっこい身体は宙に浮いてしまって、窓ガラスに必死にしがみつくしかなかった。

「うあっああっ…はあ…」

「どうやら…ここは、手付かずのようだな…すごく…きつい」

声を上ずらせながら、改が耳元で囁く。その声がセクシーで、オレ、ズキンとしてしまった。

「だ...から...んっ...最初から...」

揺さぶられながら、オレは何とか抗議を試みる。

「い...いたい...から、もう...」

「じゃあ、痛くないように...ここを...」

改のアレが、さっきと少し角度を変えて、ある場所を集中攻撃してきた。

「どうしようもなくなる」あの場所だ。とたんに、オレはせりあがって来る快感に我を忘れた。

「は...あああっ...だめ...」

「何が駄目なんだ？秀のここ、はしたなく濡れてるな。ふいふい...」

ズンズンとオレのこと突き上げて、それでも改の、この余裕はなんなんだよ！

オレのかわいらしいアレを窓ガラスに押し付けた。そして、オレの先っぽから出ているいやらしい汁をガラスに塗りつけはじめた。

「ぼくはうそつきです...っと」

信じられない！オレのぬるぬるで、ガラスに字を書いている！

でも、先がガラスをすべる妙な感触に余計に感じてしまって...

「ひあっ...も...いくっ...」

急激に上り詰めてしまった。あわせる様に改も激しく突き上げて...

同時に達したらしい。改のモノがオレのなかに、熱くひろがった...